青春の一冊

頭がい骨から夢読む男と自分重ねる

『世界の終りとハードボイルド・ワンダーランド』村上春樹 著

丸川知雄（まるかわともお）教授

永遠に続くかと思われた大学の4年間も残すところあと数カ月。就職は決まったし、卒業も問題ない。バイトで多少金もたまった。普通ならここで卒業旅行に行くところである。だが、私はその数カ月を革新系無所属の豊島区議の選挙応援に費やした。4月末の統一地方選に向け、1月ごろから準備に入る。まず、区内全域で民家を訪ねて事前ポスターというものを張らせてもらう。公示日前にはきれいに撤去し、指定された掲示板に本ポスターを張る。その他、駅頭での演説や寸劇、徒歩での遊説など、候補者名の売り込みに手を尽くした。

公示日が近付くにつれ、北大塚の区議事務所にはいろんな人が応援に集まってきた。印刷業者や運転手は世を忍ぶ仮の姿で、心の中では世直しへの熱き思いを捨てていない人たち、フリーライターのお姉さん、わい談が好きな在日三世と韓国からのギター留学生、政治的にも性的にも過激なおばさんなどなど、大学生活4年間の中でもこの時ほど個性豊かな人たちと巡り会った時はなかった。夜な夜な宴会になって、昔のフォークや韓国の民謡やらが飛び交ったり、男性が処女喪失体験を語り出したりと、楽しいことこの上なかった。

30代以上の人たちとその子供たちが出入りすることの多かった事務所に、唯一私と同世代の女性がいた。彼女は美大生や保母を経験したり、その他ここには書けないようなことも含めて、私より人生経験ははるかに豊富だった。いつしか互いに意識するようになっていたが、その彼女が「村上春樹がもう俺はこれ以上書けない、と筆を折ってもいいぐらいの傑作」だと言っていたのが、『世界の終りとハードボイルド・ワンダーランド』である。

もちろん村上春樹は既に人気作家で、大学のクラスにも何人も村上ファンがいた。私も試しに読んでみたが、正直なところ余りピンとこなかった。だが、事務所で借りて読んだこの『世界の終り……』は妙に心にずっしり来るものがあった。

この小説では、あの世みたいな静かな世界で、頭がい骨から夢を読むことを仕事にしている男の話（「世界の終り」）と、ハードボイルドな活劇とが交互に繰り返される。私は卒論のために20年以上昔の論文を何十本と読んだが、もう絶えてしまった論争をたどる自分と、死体に刻まれた夢を読む男の姿とが重なった。

「世界の終り」の根底に流れる生に対する諦観（ていかん）が、いま人生の節目を迎えつつある自分に深く染み込んだ。この本を教えてくれた彼女との交際に入っていけなかったのも、この本を読んでから私がそうした諦観にどっぷり浸ってしまったからかもしれない。

さて4月に入って私は仕事に通うようになったが、選挙運動にも精を出し、最後には仲間たちと当選を喜び合った。あれからちょうど20年たった。あの頃自分を覆っていた諦観の霧は徐々に晴れ、現世に対する関心と欲望とが増していった。結局、私は「世界の終り」の住人にはならなかったが、その残像は今も心の隅に残っている。（寄稿）

『世界の終りとハードボイルド・ワンダーランド』（写真は文庫本上巻）村上春樹著、新潮社、単行本税込み2520円／文庫本税込み上620円、下580円

87年経済学部卒。アジア経済研究所研究員、社会科学研究所助教授を経て、07年より同教授。